

# スリランカのクリケットに関する文化人類学的研究

早稲田大学・人間科学研究科

博士後期課程1年

マワッタラゲ サンジーワ マナワラタナ

(Mawaththalage Sanjeewa Manawarathne)

クリケットはサッカーやバレーボールほど世界的に有名なスポーツではないが、発祥国であるイギリスの植民地であった国々では、非常に人気のあるスポーツであり、たんに勝利を求めるよりも、技術や穏やかなプレーにかかわるスポーツである。5日間の試合 (Test Match)、1日の試合 (One Day Match)、半日の試合 (20Twenty) というようないくつかの種類の試合があり、試合中にランチタイムやティータイムなどがある面白いスポーツでもある。

スリランカは1815年から1948年までイギリスの植民地であった。イギリスから独立するために独立運動を戦ってきたシンハラ人とタミル人がスリランカの英雄として知られている。しかし、それと同時にイギリス人に従うシンハラ人とタミル人のエリートたちからクリケットの名人が誕生し、スリランカの知られざる歴史を語っている。スリランカの独立運動はシンハラ仏教復興運動とタミル・ヒンドゥー復興運動という2つの道に別れていたが、クリケットの歴史を見るとタミル人とシンハラ人との区別がつけられていない。スリランカのクリケットの始まりにおいては、タミル人の関わりが非常に強い要素であった。植民地時代のシンハラ人よりもタミル人のエリートたちが、イギリスに従っていたことがスリランカのクリケット歴史を見るとわかる。

クリケットは、イギリス社会では Gentlemen's Sport という呼び方がされているがスリランカの場合はとても激しいワイルドなスポーツとしてとらえられている。クリケットの歴史では、1996年にスリランカが1日の試合のやり方やリズムを変えたことが知られている。国際試合以外に国内ではスリランカ独自のルールで行われる試合も数多くある。さらに、国際クリケット会議に正式な試合として認められていないスリランカ風のクリケット試合も国内では行われている。

現在、スリランカのクリケット社会に民族的対立と宗教的差別の影響が及んでいる。スリランカでは多数派のシンハラ人と少数派のタミル人との間で約30年間にわたる民族紛争が生じた。特に、スリランカの民族問題の影響がクリケットを通してイギリス、カナダ、オーストラリア、南アフリカ、パキスタン、インドにわたる問題となっている。スリランカの少数派であるタミル人による独立国家化を応援する運動が、海外で行われる国際試合を中心に増加している。

国内ではいまや民族対立は解決し、シンハラ人とタミル人はお互いに平和に暮らしているが、2000年台初頭より国際試合中に、カナダなどの国々に在住するタミル人がデモを起こして物議をかもした。海外のタミル人はいまだスリランカでのタミル王国の夢を諦めていないということを証明する現象である。また、現在仏教徒とイスラーム教徒の関係が悪化しているスリランカでは、イスラーム教徒のクリケット代表選手への反発もみられる。そしてイスラーム国家であるパキスタンとの試合中に、シンハラ人観客がイスラーム教徒に対する怒りの罵声をするといったことも顕著な事例と思われる。このように、スリランカという国家の文化について、クリケットという側面から分析することで、多民族、多宗教国家としての文化的性格や民族・宗教関係などを検討することができるだろう。